

値であったが、血清鉄あるいはフェリチンとの相関関係は認めなかった。除菌前後では、ANG群では7例は prohepcidin が除菌後に有意に低下し ($p = 0.018$)、4例はほとんど変化がなく鉄欠乏状態も変化が見られなかった。一方、GU群、DU群では除菌後も prohepcidin 値に有意な変化は認めなかった。

【結論】ANG群における鉄欠乏状態は hepcidin の上昇が影響しており、除菌により hepcidin の産生が低下し、鉄欠乏状態が改善する症例が存在する可能性が示唆された。一方、消化性潰瘍患者では、hepcidin を介した鉄代謝機構が *H. pylori* 感染による影響を受けてはいないことが示唆された。

21 十二指腸 MALT リンパ腫の治療と長期予後

角田 知行・加藤 俊幸・秋山 修宏
 本山 展隆・船越 和博・稲吉 潤
 井上 聡

県立がんセンター新潟病院内科

十二指腸原発の MALT リンパ腫はまだ報告例も少なく、治療方針は確立されていない。今回我々は、十二指腸球部の潰瘍型 MALT リンパ腫3例に対して内科的治療を行い、その有用性と長期予後を検討した。3症例ともに、発生部位は通常十二指腸潰瘍よりも球部のやや肛門側から球後部に位置し、多彩な潰瘍性病変を呈していた。sIL-2R は3例中1例のみ高値を示し、*H. pylori* はその1例のみ陽性であった。治療法として、全例で除菌を行うも消失せず、次に CHOP 療法を選択したが寛解に至らず、次いで施行した放射線療法 30Gy の照射が奏功した。その後最高7年まで再発を認めていない。自験例3例では除菌療法は奏功せず、放射線療法が有用であると考えられたが、1例で照射後の難治性の胃潰瘍が発生した。

22 胃高悪性度悪性リンパ腫 (DLBCL) における除菌有効例の長期予後

孫 暁梅・加藤 俊幸・秋山 修宏
 本山 展隆・船越 和博・稲吉 潤
 井上 聡

県立がんセンター新潟病院内科

低悪性度の胃 MALT リンパ腫に対する除菌効果は、すでに明らかで第1選択となっている。出血や穿孔を除き、高悪性度のび慢性大型 B 細胞リンパ腫 (DLBCL) でも非手術治療が第1選択となり、放射線化学療法や抗体化学療法が選択されているが、除菌治療については報告が少ない。しかし、高悪性度に対する化学療法後の完全寛解は、*H. pylori* の陰性化と相関しているため、*H. pylori* 陽性の6例において患者希望により3剤による除菌胃治療を試みた。その結果、3例で腫瘍消失を認め、6年4ヶ月、5年7ヶ月、3年の長期寛解を得ている。高悪性度に対する除菌治療の報告は少なく第1選択とまではいえないが、化学療法の前に試みる価値はあると考える。